

権九郎

へ絵に書かば 墨絵のさまや朧夜の 空ににじみし月影も 忍ぶが
岡を二人連れ へ散り来る花の白玉に へ鐘の音霞む権九郎 へ手に
手を取りてそこはかと 谷中を越えて車坂 よそ目に見れば二本の
離れぬ杉の道行は へ味な縁を出雲にて 結び違ひし神垣や へ稲
荷の森へ歩み寄り

へコレ白玉 道々も言う通り 掟厳しい廓をば 連れて退いた
上からは 所詮江戸には居られぬぞや

へ江戸の内に居られぬとて どこへ行くのでありんすよ
へンサア どころ言うて当てはなけれど 生まれ故郷の上方へで

も連れて行き 世間晴れて権九が女房 まず 京なれば木
屋町か 大坂ならば島の内 当分粹な へへ 座敷を借り

へ下女が一人に子猫が一匹 他には邪魔も新世帯 取り膳で食う
樂しみは 一つ肴をむしり合ひ 箸の先での鋳引き ひっくり返す皿

小鉢 これはしたりと飛び退いて それ雑巾よ拾えよと さんと呼び
やハイと来る ぶちと呼びやニヤンと来る これを続けて呼ぶならば

おははいのはいと言や オニヤニヤのニヤンと鳴く こんな騒ぎも痴話
半分 嬉しかろうじゃないかいな

へなんと白玉 そうなつたらさぞそなたは 嬉しかろうの
へそりやもうわちきが日頃の願ひ 嬉しゅうのうて 何としまし
よう

へあのまあ嬉しそうな 顔わいやい

へ鼻毛のばして差し覗く 馬鹿げし顔を へ流し目に
へそう聞く上は少しも早う 追手のかからぬ内 わちきや上方
とやらへ行きとうござんす が 聞けば遠い所とやら お前

路用がござんすかえ

へおつと そこに如才があるものか 今日千葉様へ納めに行く
為替の金の五十両 ちゃんと着服しておいた これを路用に
通し駕籠 伊勢参宮から大和をば 廻つた所が まさか二

分にはなりやあしまい

へそんならそこに 持つて居やしゃんすかえ
へ何で嘘をつくものか 疑わしくば サこれを見や
へンマアこりゃほんに お金でござんすな

へしかも小判で五十両 これさえあれば大丈夫
へ押し戴けば後ろより 財布めがけて一掴み あわやと驚く権九郎

池の深みへ

へ伝次さん

へコレ

へむらかもめ

へ伝次さん うまくいったねえ

へそうよオ 濡れ手で粟の五十両 この金の手に入ったのも
みんなお主のお蔭 白玉 いい度胸になったなあ

へこれもみんな お前に仕込まれたんだよオ

へ俺だといって まさか鉄を持って生まれやしねえ これでも以
前は武士のたね 藁の上から町家へやられ 育ちが悪さに中
着切り 悪いこたア覚え易く 今じゃどこの盛り場でも 顔
を知られた牛若伝次 然し盗んだもなア一文でも 身に付
けたこたアありゃアしねえや 二人が仲の離れねえのも これ
が悪縁とでも言うのだらうよ

へ今更言うのも愚痴ながら お前とこういう仲になったのも
忘れもせぬ 去年の秋

へまだ新宅の店先を へそそるいなせの地廻り衆 多くの中でこなき
んが ふつと目につき物言いかけ 初手は浮気な格子色 へ朋輩衆
になぶられて 話もならず裏茶屋で たまに逢うさえ束の間も へ
涙の雨に離るるが ここが苦界じゃないかいな へ折しも告ぐる後夜
の鐘 伝次はすげなく立ち上がり

へまたもや追手のかからぬうち 世田谷道から厚木街道

へアアモン その道は 寂しいかえ

へどうせ駆け落ちをする道だもの 賑やかなこたあ ありゃあ
しねえや

へそれだつて 何だか気味が悪いねえ そりゃそうと あの権九

郎は どうしたろうねえ

へどうするものか 土左右衛門よ

へエエ

へサア ぐずしねえで 早く支度をしねえか

へアイ

へあいと白玉帯締め直し 二世を掛けたる中島を あとに三橋や清
水門 人目厭うて走り行く。